

『職業としての学問』末尾の「デーモン」とは何か——マックス・ヴェーバーの人生と闘いを支えた究極の立脚点は何処にあったか

3月20日、東洋大学白山校舎6号館6122番教室で、「ヴェーバー研究会21」第8回が開かれ、野崎敏郎著『マックス・ヴェーバー「職業としての学問」の研究(完全版)』(2016、晃洋書房刊、436ps. 上下二段)およびマックス・ヴェーバー著・野崎敏郎訳・注釈『職業としての学問(圧縮版)』(2016、晃洋書房刊、185ps. 内98ps. 上下二段)をめぐる、著者野崎氏も含め、約25名の参会者により、活発な議論が交わされた。

PM 1:00 中野敏男氏の司会で開会、野崎氏の趣旨説明報告、別府昭郎・深井智朗・三笥利幸、三氏による討論への問題提起、報告者と討論者との相互コメントのあと、一般討論に入り、筆者も下記の資料を用意・配布して、議論に加わった。ここに、発言の要旨を記録し、多少補足する(アンダーラインによる強調は引用者。敬称略)。

2016年3月20日「ヴェーバー研究会21」資料

折原 浩

1. 科学の三権能 [1] 所与の目的にたいする手段の適合度の検証、2) 当の手段を採用した場合の随伴結果の予測、3) 目的それ自体にかかわる意味連関の解明] (完全版: 258; 圧縮版: 36)

a) Wenn man die und die Stellung einnimmt, so muß man nach **den Erfahrungen** der Wissenschaft die und die M i t t e l anwenden, um sie praktisch zur Durchführung zu bringen. Diese Mittel sind nun **vielleicht schon an sich** solche, die Sie ablehnen zu müssen glauben. **Dann** muß man zwischen dem Zweck und **den unvermeidlichen Mitteln** eben wählen. (WL, 7. Aufl.: 607; MWG I/17: 103)

b) Er [=Der Lehrer] kann Ihnen ferner natürlich sagen: wenn Sie den und den Zweck wollen, dann müssen Sie die und die Nebenerfolge, die dann erfahrungsgemäß eintreten, mit in Kauf nehmen: wieder die gleiche Lage. Indessen das sind alles noch Probleme, wie sie für **jeden Techniker** auch entstehen können, der ja auch in zahlreichen Fällen nach dem Prinzip des kleineren Übels oder des relativ Besten sich entscheiden muß. Nur daß für ihn eins, die Hauptsache, gegeben zu sein pflegt: der Zweck. Aber **dies** ist nun für uns, sobald es sich um wirklich »letzte« Probleme handelt, **n i c h t der Fall**. (WL: 607-08; MWG I/17: 103-04)

2. Dämon の意味とヴェーバーの定位 (完全版: 301-04, 374-75; 圧縮版: 141-43)

a) Daraus wollen wir die Lehre ziehen: daß es mit dem Sehnen und Harren allein nicht getan ist, und es anders machen: an unsere Arbeit gehen und der »Forde-

rung des Tages« gerecht werden—menschlich sowohl wie beruflich. Die aber ist schlicht und einfach, wenn **jeder** den Dämon findet und ihm **gehört**, der

seines Lebens **Fäden hält**. (WL: 613; MWG I/17: 111) [ὁ βροῦς, μοῖρα, πειροπιετης, δαίμων]

b) We shall set to work and meet the ‘demands of the day,’ in human relations as well as in our vocation. This, however, is plain and simple, if **each** finds and **obeys** the demon who **holds** the **fibers** of his very life. (Gerth & Mills, From Max Weber: Essays in Sociology, Oxford Univ. Press, 1958: 156) [obey ⇄ obeir ⇄ ob-oedio ⇄ ob-audio]

c) Il faut s’y prendre autrement et se mettre à son travail et répondre aux demandes de chaque jour—dans sa vie d’homme, mais aussi dans son métier. Et ce travail sera simple et facile si **chacun** trouve le démon qui **tient** les **fils** de sa vie et lui **obéit**. (Le savant et le politique, trad. par Julien Freund, Plon, 1959: 122)

3. 「闘い」の二焦点——大学・学問と政治・社会（含む出版界）

1960年代以降の誤訳問題：邦訳の表記のみでなく、訳者の学風と全学問内容に加えて、大出版社の利害も絡む「闘い」の一争点。『世界の名著』第50巻「ヴェーバー」（1975）の内容構成。『客観性論文』の「補訳」（1998）。

はじめに：野崎が、ヴェーバーの生涯を「闘い」として捉え、晩年の講演「職業としての学問」をそのコンテクストに位置づけたのは卓見。当時の状況と講演内容にかんする調査は、第一次資料の発掘も含め、詳細をきわめて抜群。全体として、従来の誤読・誤訳をほぼ一掃する画期的労作。ただ、この大作が、日本の社会科学界で真価を認められ、（ヴェーバー没後百年ないし『全集』版の完結までに）決定版となるには、学界の実情に照らして、なお紆余曲折が予想される。われわれとしては、この労作をまずは著者の挑戦と受け止め、逐一内容的に応戦して、著者が、なお残されている問題点を対象化し、みずから克服していくにあたっての一助としたい。学問は論争にあり。

1.（資料の順序とは逆になるが）ヴェーバーの闘いには、「大学・学問」と「政治・社会」との二焦点があり、後者には「出版界」も含まれていた。そのパースペクティヴは、日本における誤訳問題史にも適用され、活かされなくてはならない。問題は、邦訳の表記にかぎらず、訳者の学風、全学問内容、「弟子」（しばしば「親衛隊」）との「縁故-諒解ゲマインシャフト」、加えては（誤訳を散布しつづける）大出版社の利害関心なども絡んだ「誤訳維持構造」にあり、これを切開することが肝要。資料 3. に、問題の具体的な二事例。

ちなみに、筆者は、2008年5月、加藤晴久の招聘により、「日本フランス語・フランス文学会」春季大会のワークショップに参加し、誤訳問題とその克服策について討論する機会をえた。「誤訳をどう改めていくか」（ワークショップにおける報告資料）および「誤

訳をどう改めていくか—— 一社会学者としての経験から」(日本フランス語・フランス文学会 cahier 02 septembre 2008, p. 7) を、本 HP 2008 年欄に掲載(転載許可あり)。

2. ヴェーバーにおける人生と闘いの立脚点を究明する手掛かりとして、(資料 2. に引用した)最終第 40 段落の末尾が重要。赤字で記した語に注意。野崎はここを、尾高訳・出口訳と同じく、「自分の命の糸を操っている内なる力をみつけ、それに従うならば」と訳出(完全版: 292, 圧縮版: 44)。その「内なる力」とは、「個人が意欲をもってなすことの中なかでも、とくに情熱が枯れることなく滾々と湧き出て、あたかもなにもものかに衝きうごかされるかのごとく、情念の奔流に身を委ねて一事に邁進するとき、その個人を動かしている駆動力・推進力」(完全版: 302, 圧縮版: 142)、また、(創作活動にかんするゲーテ晩年の追想を引用しながら)「人間を内側から衝きうごかし、その行為に内的推進力を与え、情熱を燃焼させつづける源」(完全版: 304, 圧縮版: 143) と解している。

しかし、筆者はここを、「各人が、自分の命の糸 [複数] をしかと捉えて離さないダイモーンに気がつき、その声に聴き従うならば」と訳出する。一見些細な違いのようではあるが、ヴェーバーがまず、ダイモーン的作用を、[ゲーテのように芸術的趣向と創作のカリスマをそなえているとはかぎらない、この講演の聴衆をなす若い学生] 各人の生を「しっかり繋ぎ止める halten, hold, tenir」 「糸」にたとえ、しかもその「糸」を複数形で記している事に注目したい。それというのも、「糸」は、一点を固定しなければ、なにも縫えず、いかに情熱を掻き立てて運針につとめても、徒労に終わるほかはない。「糸の切れた凧」は、どこへ飛んでいくか分からず、勢いのよい大きな凧ほど、落下地点に災いをもたらしかねない。

じつは、晩年のゲーテも、出世作『若きヴェルテルの悩み』を創作した当時の「内なる力」を「業火」に譬え、これと再会するのが怖くて、自作の頁も開いたことが [一度しか] ない、と(『エッカーマンとの対話』のどこか [じつは、J. P. Eckermann, Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, hrsg. von H. H. Houben, 1959, Wiesbaden, S. 412, 山下肇訳『ゲーテとの対話』下、1969, 岩波文庫、43 ページ、2016 年 8 月 13 日 追記] で) 語っていた。ヴェーバーが、第一次世界大戦敗戦の前後、さなきだに「不毛な抽象的情熱」に駆られやすい若者・学生に、そういう「内なる力」を焚きつけ、掻き立てようとしたであろうか。むしろ、少なくとも複数の「糸」の一本は、正反対に、そうした情念の過熱を戒める「諫止の声」ではなかったか。

筆者は、「日々の要求」をゲーテに遡って解釈し、「根源制約者 das Urbedingende」との関連を論じた。ところが、野崎は、この点について「ゲーテとヴェーバーとは違う」(「ゲーテは『神』を認めていたが、ヴェーバーは『神なき時代』に生きた」と一蹴する(完全版: 302)。しかし、この「内なる力」にかけては、野崎が、ヴェーバーとゲーテとを無造作に結びつけてはいまいか。「無造作に」というのは、「双方にとって『神』とは何か、言表の奥底に遡って追求することなしに」という意味である。

なるほど、「諫止の声」とは対照的に、意気消沈した人を支え、生に繋ぎ止める「内なる(励起の)力」も、やはり一本の「糸」を通して伝えられるにはちがいない。しかし、それはなにか[野崎が想定しているような]「情熱を掻き立てる」強烈な力ではなく、むしろ「生きていく希望を絶やさないうちの光」ともいうべきものではないか。ちょうど、30歳そこそこで正教授職に登り詰めた順風満帆の少壮ヴェーバーが、神経疾患によって急転直下、「再起不能」に近い境遇に投げ落とされながら、なおかつ日々を生き延び、やがて当の「暗黒の運命」と和解し、しかもそこに「意味」を見出し、むしろ、それまでは禁欲的職業労働に凝り固まっていた情念を、緩和し、溶解させて、(生活価値・美的価値等々からなる)人生価値総体のひとつに相対化し(「禁欲のプロテスタンティズム」とそれに由来する「職業理念」を一面的に否定するのではなく、一契機に「止揚し)、そのようなものとして「担い直す」方向に歩み出たとき、かれのなかに静かに漲っていたのも、その種の「糸」を伝って恵まれた「励起の力」ではなかったか。

そのように、ヴェーバーが56歳で急逝する直前に発した語「デーモン」の意味を、かれの生活史に遡り、その外化・凝結態としての作品群の内容にも照らし合わせて究明していく課題は、今後留保されなければならない。ただ、そうした再解釈へのあくまで仮説的な問題提起として一言すれば、かれが、カール・バルト以前に、16世紀のルターと13世紀の親鸞との(少なくとも「絶対他力」「万人祭司主義」「わざ誇り *Werkheiligkeit* 否定」にかけての)通底性に着目し、『ヒンドゥー教と仏教』中の「日本論」で明示的に指摘していた事実、「倫理論文」中でも、そのルターにたいするタウラー他「ドイツ神秘主義」の影響を重視していた事実など、作品中の諸論点が、注目されよう。また、この関連で、マックス・ヴェーバーが、若い頃、伯母イダ・バウムガルテンや母ヘレーネ・ヴェーバーの宗教性をよく理解し、一定の共感は表明しながらも、最後のところでは留保していた生活史的事実、幼少時からの教会通いの影響、などが、改めて問われなければならない。

ここではむしろ、いま少し第40段落の末尾にこだわり、語「ダイモン $\delta\alpha\iota\mu\omega\nu$ 」の意味とニュアンスを、出所のギリシャ世界に遡って検討してみよう。アマチュアの所見にすぎないが、ギリシャ文化を構成する「アポロン」型と「ディオニュソス」型とのうち、前者に「親和性」をもち、ヴェーバーも熟知し、ランケとともに「偉大な歴史家」のひとりに数えていたトゥーキュディデースは、つぎのような歴史哲学を説いたとも解せられよう。すなわち、たとえばペルシャにたいするギリシャ勢勝利の立役者となったアテーナイのように、ある勢力が故あって覇権を握り、「仲間のなかの第一人者 *primus inter pares*」から強大な支配権力にのし上がると、思わず「驕り $\epsilon\upsilon\beta\rho\iota\varsigma$ 」に捕らえられ、「運命の女神 $\mu\omicron\iota\rho\alpha$ 」の嫉妬を買い、「内紛」によって「急転直下 $\pi\epsilon\rho\iota\pi\epsilon\tau\eta\varsigma$ 」没落する運命に見舞われる。その直前、「驕り」を戒める「諫止の声」を耳元で囁くのが「ダイモン $\delta\alpha\iota\mu\omega\nu$ 」であり、これに「聴きしたがい」、「節度をわきまえ、欲望を自制して、平

衡を回復する」のが「聡明 $\sigma\omega\phi\rho\sigma\upsilon\nu\eta$ 」であろう。ところが、世の勢力と驕れる人は、「聞く耳をもたず」、転落の運命に身を委ねる。

さて、『職業としての学問』末尾の「ダイモーン」にかんする、こうした再解釈は、じつは 1960 年代以来、筆者が、一方では、滝沢克己の普遍神学（「神一人の不可分・不可同・不可逆の原関係」論、「インマヌエルの原事実」論、「ただの人」論）を学び、他方では（滝沢が「主体的主体性」論者と見て評価しない）ヴェーバーをなおかつ研究し、その経験科学の方法を、滝沢と共通の状況内投企に活かそうとつとめる、ある種の緊張関係のなかから、生まれ、展開されてきたものである。

滝沢は 1968 年、九大構内への米軍ファントム・ジェット機の墜落を契機とする九大闘争の現場から、全国の社会科学者は総崩れのなかで、「『人間として』とはどういうことか」「人間の『原点』とは何か」という学生・院生の問いに正面から答える普遍神学を携えて、颯爽と登場した。いま少し立ち入っていえば、大学闘争・全共闘運動の「上昇・昂揚局面」では、状況における具体的争点（冤罪処分や機動隊導入）にかかわる「人間としての（一個人として責任を明らかにする）発言」と「組織の一員としての（「存在被拘束性」と「観念的利益」に引きずられて、一個人としての責任を回避する）逃避-隠蔽-自己欺瞞」とが、截然と分かれ、一目瞭然だったから、「人間として」とだけ語れば、事が足りた。ところが、大学当局-国家権力による弾圧と、運動自体の拡散-先細り-暴発-自滅といった「後退局面」では、「『人間として』というが、その『人間』とは何か」「『闘い』というが、何を『究極の拠り所』として、どう『闘う』のか」といった問いが、重くのしかかり、「ミネルヴァの鼻」が飛び立ち始めた。この問いに答えて、滝沢は、「『神』は万人の足下にきている、ところが人間はなぜか、『大地』の『根 radix』から遊離し、われひとり立とう延びようとする恣の『思い』に囚われ、どこかに『偶像』を立てて、縋りつこうとする」「そういう『思い』を捨て、『無心に』『大地』に降り立ち、『根』から『神』を受け入れ、『ただの人』として生きよ」「それはあくまで万人に可能である」と説いたのである。

ところが、筆者は、滝沢の論旨を、ベルクソンの「水草」の譬え（『道徳と宗教の二源泉』の冒頭で、その主題を予示している譬え。水面上で互いに絡み合いながら「流れのまにまに漂う」水草と、底土に根を張って「流れに抗する」ことのできる水草との区別）と重ねることで、なんとか知解はできるように思えたが、「神一人の不可分・不可同・不可逆の原関係」論となると、いかんせん抽象的で、「これこそが貴君の脚下にもきている具体的な原事実そのもの」と力説されても、正直のところ、どこか「腑に落ち」なかった。むしろ、状況における滝沢師自身の一貫した実践姿勢と、オイゲン・ヘリゲルを引いての明快な例解（滝沢『競技・芸術・人生』所収）から、その真実性を確信したのである。

やがて、学問道においても（弓道その他、諸「道」の奥義と同様）、研究（稽古）を重ねに重ねて「無心」の境地に達したとき、思いがけず恵まれる「着想」や「靈感」が、決定的に重要で、そこにもやはり「僥倖が支配」している、というヴェーバー（『職業としての学問』

第 14 段落) の洞察が、ヘリゲル—滝沢の指し示す根源的事態に通底していることに気がつき、ヴェーバーの人生と闘い総体を、滝沢「原点」論の側から解明する試みに着手し、おそらくは多分に「深読み」した。翻って、「『ただの人』として生きる」といっても、所詮は生身の人間、一挙に「中を行ける」わけがなく、「一本道を直進」はできず、「過熱」と「消沈」の間で動揺し、「諫止」と「励起」の「糸々」に支えられるほかはない、というふうに、滝沢「原点」論のほうも、経験的に再解釈した。

ところで、周知のとおり、ヴェーバー没後、ドイツには、1930 年代からナチズムが台頭し、ヤスパースは解職されても沈黙して抵抗したが、ハイデガーやヘリゲルは、屈伏するどころか、積極的に荷担してしまった。600 万人のユダヤ人虐殺にたいする責任は重い。「大哲学者」であろうが「根源的なことを明快に語ろう」が、当時の状況で「糸の切れた凧」のように政治的—社会的「非行」に走り、その過去に向き合おうとせず、「沈黙」を決め込んだのは、人間として不誠実で無責任というほかはない。それにつけても、ヴェーバーやヤスパースが、ハイデガーやヘリゲルや西田幾太郎門下の「京都学派」とは異なり、「ダイモーン」による根源的制約を察すると同時に、経験科学を「責任倫理」的な状況内実践に活かすスタンスもそなえていた事実が、改めて注目されよう。しかし、この問題は、滝沢「原点」論登場の背景と状況の問題、ということつまり、第一次世界大戦後ドイツと、第二次世界大戦後日本との「歴史—社会学」的な異同の問題とも絡めて、別途、詳論したい。

ただ、ここでも、当面の議論との関連で一点付言すれば、筆者は確かに、『職業としての学問』第 14 段落の指摘——すなわち、「(根拠を明確にして) 専門の仕事に自己限定のうえ、研究(稽古)を重ね、被造物的情念が滅却された果てに、ある「無心」の(「神秘主義」一般の言い回しでは「被造物が沈黙するときのみ、神が語る」という)境地で、思いがけず「着想」と「靈感」に恵まれうる、という指摘——と、同第 40 段落の末尾に語り出された「デーモン」との通底性を察知し、これを掘り起こし、「専門性から『一即全』『個即類』への『縦深的突破』の可能性」を認め、これをさらに、ベルクソン、ゲーテ、ドイツ神秘主義、ヘリゲル、滝沢克己らの洞察と関連づけ、可能なかぎり普遍化的に論じた[拙著『デュルケームとヴェーバー』下、1981、三一書房、286-95 ページ、他、参照]。

筆者は、第 14 段落を「着想を得るコツの伝授等々」(完全版: 110) とは解さない。しかし他方、野崎のように、そこでは「現代科学者の危うさ」や「僥倖に翻弄される……不条理性」(完全版: 110、アンダーラインは引用者) が指摘されるだけで、第 40 段落にいたって初めて、「別の地平」から「閉塞状況」の「打破」が教唆される、というふうには読まない。ヴェーバーは、もとより「学知主義」の「専門閉塞論者」ではない。しかし、さりとて、「閉塞状況」に「内なる力」をもって「風穴を開け」ようと「勇を奮う」情念猛者でもないと思う。筆者のそうした解釈が、あろうことか「滅私奉公論の一変種」(完全版: 374) と決めつけられるのも、かえって、その種の主意主義的観念論に由来する機械論的対比ではないか。

ちなみに、野崎の叙述では、「合理化」「呪力剥奪」「主知化」「主知主義」「不条理」「人間として」「人格」といったキーワードが、無概念のまま空転しているように見受けられる。そのうえで、野崎は他方、先行の諸説にたいしては、論拠を示して淡々と異議を述べ、結論は読者に委ねる、というのではなく、むしろ「錯誤」「迷妄」「妄想」「妄念」「妄論」「歪曲」「矮小化」「凡庸」「凡百」……等々と決めつけ、論詰して止まない。こうした語調が、かえって自説の説得性を減殺し、「唯我独尊」と（裏腹の）「巨人ヴェーバー崇拜」という印象を触発しはしないか。少なくとも、相手（ないし読者）の反省一反論よりもむしろ、反撥を誘い、誤読・誤訳の一掃という主観的意図には反して、かえって「誤訳の防衛—維持構造」の補強という「反動」を招き、「前轍を踏む」おそれはないか。『職業としての学問』に開陳されたヴェーバーの人生論・科学論からは、現代日本の現状況への本書の投企についても、「目的達成」の他、いかなる「随伴結果」を生じさせるか、経験科学的に予測し、語調を制御する「著者としての責任倫理」が要請されよう。

3. ところで、その経験科学の権能について、野崎の訳文と解説には、筆者としては理解し難い問題点が認められる（資料 1. 参照）。

まず、第一権能にかかわる資料 1.-a) の箇所を、野崎は「もしもかくかくの立場をとるならば、その立場を実際に貫くためには、科学の見聞にしたがって、しかじかのさまざまな手段を用いなくてはなりません。さてこうした手段は、たぶんすでにそれ自体が、諸君が拒絶しなくてはならないと思っている手段 [=主知主義の手段] です。そうすると、目的と不可避の手段とのあいだで、まさに選択しなくてはなりません」（完全版: 258, 圧縮版: 36）と訳出している。

ところが、筆者はここを、つぎのように解釈する。多少敷衍すれば、「ある立場を貫徹するには、まず、その立場から整合的に設定される『目的』を実現するのに『適した』手段を選択しなければならないが、そのさい科学は、『経験の規則』にかんする知識に照らして『経験的に妥当な』（つまり『目的』達成の『公算』ないし『客観的可能性』の高い）『手段』を場合によっては複数、選択可能な候補として挙示することができる。ところが、そのひとつひとつについて、実践的な価値観点から評価をくだしていくと、当の手段が『すでにそれ自体として』、ということはつまり、つぎの第二権能による随伴結果の予測を待つまでもなく、実践的には拒否すべき性質をそなえていることもある。そのようにして、複数の候補のいずれもが、実践的に好ましくないと判断されるとすれば、『その場合には dann』『目的』実現を断念するか、（断念はせずに）好ましくない『手段』を甘受するか、どちらかを選ばなければならない」。

具体例を挙げると、いまかりに「ストレス解消」という「目的」が与えられたとして、その実現のために、また、そのかぎりで、「麻薬」や「向精神薬」の使用といった「薬理学的には妥当な」「手段」、あるいは「人間関係の葛藤」や「社会的適応不全」を「除去」ないし「緩和」する「心理療法」的「手段」などが、採用可能な候補としては考えられ、それぞ

れの「適合度」を経験科学的に検証することもできよう。しかし、かりにわたしが「個人としての精神的自律の堅持」という信条に生きているとすれば、そうした実践的価値理念からは、上記いずれの「手段」も、それぞれの「随伴結果」の予測を待つまでもなく、「当の価値を（直接）毀損する」「当の価値理念に悖る」という意味で、「好ましくない」として拒否されよう。

あるいは、他の実例としては、犯人検挙という「目的」のため、状況証拠を固めて詰める正攻法を優先させて、「おとり捜査」という（経験的には）「有効」ながら（実践的には）「疑わしい」「手段」は断念する、という選択など、無数に考えられよう。

ところが、野崎による上記引用文、とくに [=主知主義の手段] という野崎の挿入句からは、「諸君」 [=聴講者] がすべて「反主知主義者」で、「手段」の「適合度」にかんする経験科学的な検証をも「拒否」しているか、（首尾一貫しようとするれば）「拒否」しなければならないか、そうヴェーバーが決めてかかっている、という印象が生じかねない。

つぎに、資料 1.-b) の、第二権能「『目的』にたいする適合的な手段の採用によって生ずる『随伴諸結果』の予測」についても、「第一権能」の応用の場合とまったく同様で、「目的」達成と不可避の「随伴結果」（犠牲）とのどちらを採るかの選択は、科学ではなく、実践の課題である。しかし、この問題は、いかなる技術者も、「犠牲を少なくして目的は最大限達成する『相対的に最善』」という原則にしたがって、日々解決しているはずで、野崎の想定（完全版: 262）とは異なり、「とくに誰なのかを特定」すべき特別の「テクノクラート」かぎりの問題ではない（圧縮版: 124-25 の「社会主義化」にともなう「副産物」という引例は、技術者ないしテクノクラートの実例ではないが、原則論としては無難であろう）。

ところで、ヴェーバーの論旨（資料 1.-b) の第二～四文）に戻ると、技術者一般には、「通常、主要な任務すなわち『目的』が与えられている」。ところが、「われわれにとっては、じっさいに『究極の』問題が採り上げられるや、このこと [つまり「主要な任務すなわち『目的』が与えられること」] がなく、そこでまさに目的が問われ」る。そして、そのときこそ、科学の第三権能が呼び求められ、「目的」と「究極の価値理念」との意味連関が解明され、その論理的整合性が問われ、検証されよう。

ところが、この箇所、野崎訳では「実際に『究極の』問題を取り上げるやいなや、まさにこの目的こそが、いまわれわれにとって問題でないのです」と、正反対に解され、訳されている。

筆者の上記具体例をここに持ち越して敷衍すれば、「なにがなんでも『ストレス解消』」という所与の目的が、疑われ、その「強迫性」が薄れる場合に相当するであろう。そのとき、（場合によっては）「実存分析」ないし「現存在分析」という「経験科学」（別種ながらも、あくまで「経験科学」）によって、「生の意味連関」における「ストレス」そのものの「位置価」が問われよう。そして、「ロゴセラピー」（V. E. フランク）としての対話により、あるいは「現存在分析」（L. ビンスヴァンガー）の「垂範的顧慮」にもとづく選択可能性の開示

により、「ストレス」への固着と悪あがきからは解放され、むしろ「ストレスを抱え」「ストレスと付き合いながら」生きる、できればそうすることによって「それだけ生を豊かにする」地平が開ける、ということもありえよう。もとより、「精神的自律」のもとで、規則的
生活、適度の運動と気晴らし、などが併用されてもよい。

しかし、いまひとつ技術畑からの実例としては、原発稼働—再稼働の「随伴結果」として、
(たとえ「想定外」であれ) 修復不可能な事故が起きないとはかぎらず、かりに事故が起き
なくとも処理手段のない「放射性廃棄物」という(ヴェーバーはまだ範疇としては正視してい
なかったし、そうできるはずもなかった類型の)「随伴結果」が蓄積されて、半永久的に子孫
に累をおよぼす、という「経験科学」的因果連鎖が予測され、そこから翻って、原発という
当の「目的」自体が問われ、代替エネルギーへの転換と、稼働原発の安全な廃棄への方途が
問われる、現下の問題状況を挙げるのが適切であろう。

そういうわけで、筆者には、「科学の三権能」にかかわるヴェーバーの議論は、かれのテ
クストを内在的に読み、人間常識に即して解釈することだけでも、十分理解できるように思
える(だからといって、従来の邦訳に誤訳がなかったというのではない)。それにたいして、野
崎が、ヴェーバーの論議を、当時の思想状況に遡り、ドイツ各地に散在している第一次資料
も掘り起こして調査し、ヴェーバー自身の念頭にあった実例を前景に取り出すことによっ
て、的確に解説したこと自体は、野崎の「独壇場」ともいえる研究成果として、どれほど評
価しても評価しすぎることはない(そうした研究を「外在的アプローチ」と決めつけて、「内
在的読解」を対置しようとするのではない)。

ただ、野崎が「ヴェーバーとその妻の書いたものだけを耽読」することによってヴェーバー
を理解することはまったく不可能であり、彼の生きた時代を知り、彼が立ちむかった問題群
に彼とともに立ちむかい、彼が置かれていた問題状況のなかで、彼がどのような潮流に抗い、
誰と闘い、なにをめざしていたのかを突きとめたときに——そのときにはじめて——彼の
立論と思想を理解できる。筆者は、まさにヴェーバー耽読者たる『ヴェーバー研究者』で
ないからこそ、ヴェーバーその人にかんする重要な新事実を発見し、その意義を解明するこ
とができたのである」(完成版: 436、アンダーラインと挿入 [……] は引用者) とまで言表する
のは、いかななものか。野崎ほどにドイツ留学・滞在と資料調査の余裕は持てないヴェーバ
ー研究者は、みな「ヴェーバー耽読者」で、ヴェーバーを「まったく理解できない」こと
になるのか。この言表にかぎっては、(批判対象にたいするヴェーバー本人の両義的関係とは異
質の) 一面性が吐露され、多大な業績を達成したがゆえの「驕りὕβρῦς」が、微かに兆し
てはいないか、という一抹の危惧も禁じえない。

筆者としては、「耽読」によっても理解できた科学の三権能を、自分の状況内投企に活か
すことを優先させ、そうするなかで、野崎の研究にも学び、ヴェーバーへの理解も深めてい
きたい。

わたしたちの目標は、わたしたち自身の状況における上記「二焦点の闘い」（資料 3.）をよく闘うことにある。筆者自身としては、そうすることを通して、「日本社会の現場からの根底的民主化」に寄与していきたい。そのコンテキストでこそ、先覚者ヴェーバーの仕事を学び、わたしたち自身の闘いに活かすこと、あくまでもその一環として、『職業としての学問』にかかわる長年の「誤訳維持構造」を打破し、妥当・適切な読解を普及させることが、大切であろう。

「ヴェーバー研究」を「完成」させることが、それ自体、目標なのではない。そもそも科学に「完成」「完全」はない。この「限界」を見据えるときに初めて、「では、一生かかっても完成にいたらず、中途半端に終わるほかはないと初めから分かっている学問研究に、自分はいったいなぜ携わるのか、そうすることが、自分の実践的な生活と人格形成に、どういう『意味』をもちうるのか」という問いが発せられる。そのとき、日常的な「没意味」専門「経営」の「殻」に閉じ籠もって「安定」を享受していた「専門科学者」も、ようやく目覚めて、科学の三権能を活かす「責任倫理」的実存として生きる道に踏み出し、「科学迷信 Wissenschaftsaberglaube」（ヤスパース）から脱するすべを知る。これこそ、講演『職業としての学問』に開示された人生論・科学論の精髓ではないか。

「文化財」（ちなみに「財 Güter」とは、たんなる「所産」一般ではなく、「救済財 Erlösungsgüter」も含め、人間欲求の対象となる一見「善きもの」）の総量が、個人一生の摂取限界を越えた近現代に生を受け、「文化財」増殖体制に巻き込まれた「文化人間 Kulturmensch」は、当の「文化財」の呪縛からいったん逃れて、その「意味」を根底から問い返さないかぎり、死と生を歩一歩「無意味」にする（もとより「学問」も含む）「文化経営」を、あるいはそれとは知らず、それだけ加重ないし加速するほかはない。

その先に、何があるか。この世界を、戦争への意図的適用による「急性」の破滅、あるいは「平和利用」による「慢性」の死滅へと導く、「原子核の分裂ないし融合にともなうエネルギーの解放」は、ことによると、そうした運命の加重・加速に警鐘を鳴らす「諫止の声」かもしれない。

[2016年3月22日、起稿、同28日脱稿、同31日、改訂増補、8月13日、再改訂増補]